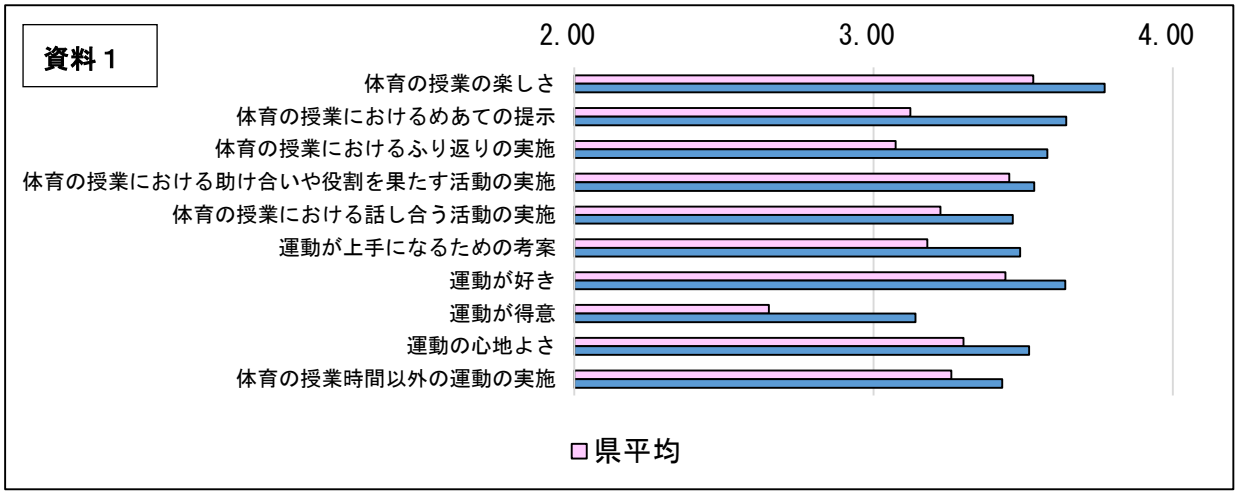
Ⅳ　研究の成果と課題

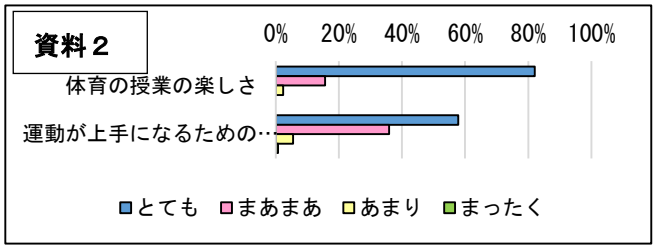
１　研究結果の考察

資料１は、平成２９年度と平成３０年度にかけての熊本県体力向上推進実践校に指定されている学校で使用された「運動についての質問紙」の一部を利用したアンケート結果である（運動に対する意識や行動を４点満点で評価したもの）。



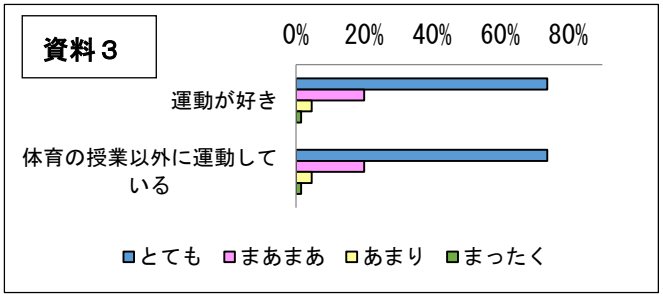
この結果から、本校児童は体育学習の学び方を身に付けながら、体育の授業を楽しみ、その結果、運動に対して好意的であることがうかがえる。

≪仮説１　教科体育の充実　≫

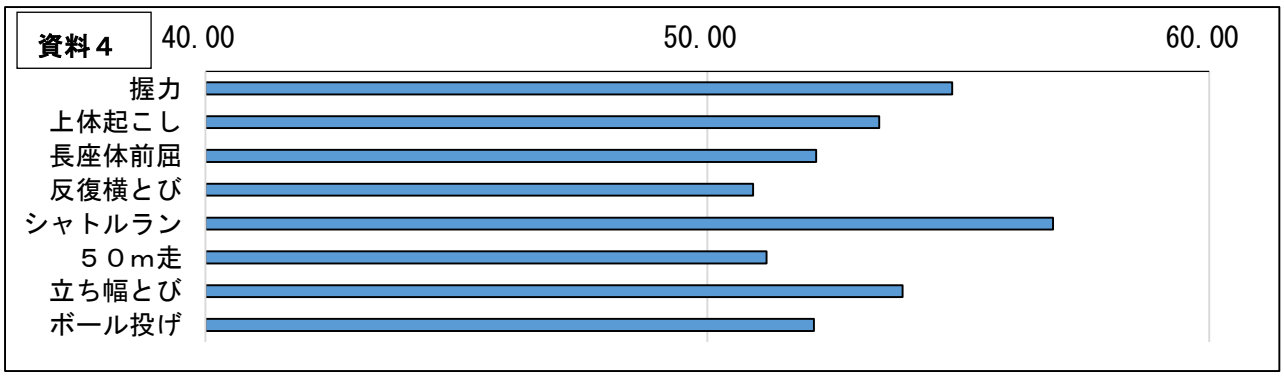


資料２は、資料１をもとにした「体育の授業が楽しいか」と「運動するとき、どうしたらその運動が上手になるか考えているか」という質問についての児童の回答である。これによると、９８％の児童が「体育の授業が楽しい」と回答している。また、９４％の児童が、「運動するとき、どうしたらその運動が上手になるか考えている」と回答している。つまり、授業の中で身に付けさせたい学習内容および技能のこつやポイントを明らかにする取組を日常的に行うことで、「どうしたら運動が上手になるか」というテーマをもちながら運動し、そこに楽しさを見出している姿がうかがえる。

≪仮説２　体力の向上　≫

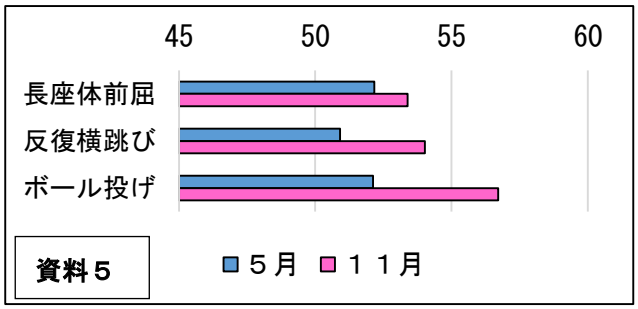


資料３は、資料１をもとにした「運動が好きか」と「体育の授業以外に運動しているか」という質問についての児童の回答である。これによると、９４％の児童が「運動が好き」と回答している。また、同じく９４％の児童が、「体育の授業以外に運動している」と回答している。これまでの体育授業の積み重ねとともに、「運動遊び」と「かかわり合い」、「日常化」をキーワードとした取組により、運動好きで日常的に運動するという姿となって表れている。



資料４は、今年度（平成３０年度）の５月に実施した体力テストの結果である。これによると、全８種目において県平均を上回っていることが分かる。特に、シャトルランについては、前年度の課題として捉え、縄跳びを中心に取り組んできた成果だと考えられる。

資料５は、５月に実施した体力テストの結果から全校の課題として捉えた３種目について、再度１１月に体力テストを実施したものである。どの項目も大きく伸びていることから、体育授業や全校体育の取組、また、校内の環境設備等で、本校児童が運動に親しめる環境づくりに努めてきた成果と考えられる。



２　研究の成果と課題

≪仮説１　教科体育の充実　≫

〇教師が身に付けさせたい学習内容を整理し、こつやポイントを明らかにして授業に臨むことで、児童は学習の仕方を理解し、自ら「どうしたら運動が上手になるか」を考えながら、より主体的に学習をすることができた。

〇めあてのもたせ方や学び合う場を工夫することで、児童は仲間同士でかかわり合い、自らの活動をふり返り、「次はこうしたい」という思いに至るなど、主体的・対話的で深い学びにつながっていった。

〇ＩＣＴ等の活用により、友だちだけでなく映像との対話が生じ、より技を磨こうとするなど、主体的・対話的な学習につながっていくことが明らかになった。

▼体育に限らず、学習の基盤となる学び方の共通理解・共通実践を徹底するとともに、学年間格差をなくしていくことで、更なる運動への意欲や技能の高まりが期待できる。

≪仮説２　体力の向上　≫

〇児童が日常的に運動できる環境を整備することで、児童は体育の授業以外にも運動をしようとする姿が多くなり、運動に対して好意的に捉える児童が多くうかがえるようになった。

〇全校体育の内容を工夫することで、児童の運動の日常化が高まり、結果として柔軟性や敏捷性など、技能の高まりが見られるようになった。

▼運動への意識について、児童の実態把握を行いながら、児童会活動等、全校での取組を行ったり、更なる環境整備、および、家庭との連携を図ったりしていくことで、一層の運動の日常化が期待できる。